



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



マースレニツァ祭り in リーブラ

安部 花子

3月3日、田町リーブラでのマースレニツァに参加しました安部と申します。昨年は諸事情により涙を飲んで開催を見送ったマースレニツァ、今年は日本の雛祭りとも重なり、寒い冬を吹き飛ばすような盛大なマースレニツァを開催することができました。

マースレニツァといえば、ロシア人が冬の間に渴望してやまない春の訪れを祝い、厳しい冬を送り出す儀式です。今回のマースレニツァでは、ホールにて歌や踊りを楽しんだあと、調理室へ移動しブリヌイを食べ春の到来を祝う、というプログラムを千葉副会長が企画してくださいました。今回そのブリヌイ調理のお手伝いをさせていただき運びとなり、大張り切りで午前中から調理室で岩橋理事と一緒にブリヌイクッキング！（私が作った分はあまり上手に焼き上げることができなかったのですが、他のメンバーが焼いてくださったキレイなブリヌイと併せて、参加者の皆様が寛大な心で楽しく召し上がって下さり大変感謝でした…。）

ブリヌイの支度をバトンタッチイベントの本会場であるホールへ移動すると、開始までの待ち時間の間、美しいロシア国内のさまざまな地域の冬景色がプロジェクターに映し出され、幻想的な雰囲気です。

いざ、舞台の幕開け。男の子が舞台上に登場し、ヤクーツクの「口琴」という楽器の演奏が始まりました。ビヨ〜ン、ビヨ〜ンという独特の音色で、シャーマニズムの雰囲気を感じさせる演奏は一見簡単そうに見えるものの、安定した音を出すのが非常に難しい楽器です。以前北海道を旅行した際、お土産コーナーでアイヌ民族の口琴のレクチャーを受けたことがあるのですが、自分の口腔を適した形にすることができず、何回やっても上手に鳴らなかったことを思い出しました。その子が上手に鳴らすのを見て、いっぱい練習したのだろうな、と勝手に感慨に耽ってしまいました。続いて、役者魂に溢れる少年たちが寸劇を熱演し、ロシアのサラファンという赤い民族衣装をきたウズベキスタンの高校生の方が歌を披露します。この方は後で美しい若草色のドレスに衣装

替えもして、一人二役をこなしていらっしゃいました。言葉の意味は分からなくても、目にも美しいでたちで舞い踊り、観客の目を楽しませてくれます。

そのあとも、純白のドレスとココシニク（頭飾り）をまとった冬の妖精やブルーのドレスとココシニクをまとった春の妖精が舞い踊り、さらには冬の妖精の方が衣装を変えて、全く雰囲気異なるジプシーの情熱的な舞踊も披露してくださいました。途中で観客も舞台前に降りてくるように促され、皆で手をつなぎ大きな輪を作って、ぐるぐる踊ったり簡単なミニゲームを楽しんだり、大いに歌い、騒ぎ…ああ、冬送りの儀式はこうでなくては、と思わずにはられない、素晴らしいイベントとなりました。

どの演目も個性豊かで、ロシアという国がいかにも多様に富んだ国であるかを思い知らされます。私のようなロシア語が分からない観客にとっても楽しめるように企画されていて、同じ空間にいただけで、まるでロシアを旅しているような雰囲気を味わうことができました。一生懸命稽古に励み演目を熱演された出演者の皆様、本当にお疲れ様でした。少し気が早いですが、来年のマースレニツァも今から楽しみです。

3月3日、港区立男女平等参画センターリーブラで行われたロシアの伝統的な春を祝う祭りマースレニツァに顔を出し、ロシア人の子ども連れ家族が多く参加する中、民族楽器演奏、歌、踊り、ゲームなどで楽しいひと時を過ごして来ました。中でもビックリしたのは、子供・大人が輪になって右手・左手、右足・左足、右耳・左耳、全身を動かして歌いながら踊る「ブージ・ブジ」と言うPLAY PARTY DANCEでした。アメリカにも似たような「HOKEY POKEY」と言うDANCEがあり、若いころ屋内や屋外でのPARTYやレクリエーションなどで良く踊ったとても楽しいDANCEに似ていてちょっと驚きました。早速、ロシア語の歌詞で覚えたいと副会長の千葉さんにナタリア先生を紹介して頂いて特訓を受けました。皆さんにもお勧めのDANCEですよ。

(85歳の会員 山田雄康)

*ご協力頂いた小嶋大師志様、鈴木省男様、中村靖様、グロバスのナタリアさんたちも本当にありがとうございました。

お知らせ

●ロシア語教室生徒募集中!

水曜初級1A-1 (19:00~20:00) 1A-2 (20:05~21:05)
土曜上級 (10:00~11:30) 月曜準中級 (18:00~19:00)
*会員の方のためのクラスです。レベルやご希望に合わせて担当よりご案内いたします。見学も一回できます。
お申込み、問合せ: NPO日口交流協会事務局
Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

●ロシア語の泉 (10)

日時: 2024年4月14日, 5月19日, 6月9日 (日) 13:30~16:00
授業料: 会員7,000円、一般8,500円 (3回分)
講師: スニトコ・タチヤーナ
*会場は事務所の予定ですが、変更もありますので事務所までご連絡ください。

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。森田哲行氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者名: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752 *なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願ひ致します。



日本の家庭料理講習会に参加して

長島 さくら

2月18日、日本の家庭料理講習会に参加させて頂きました。今回は在日ロシア大使館と通商代表部より15名、日本人5名、また在日キルギス大使夫人と娘さんが参加されました。いつも明るく素敵な小野田正子先生が講師を務め、献立はちらし寿司、しじみの潮汁、菜の花の辛子炒め、さわらの塩麹漬けでした。

品数が多いため、各班に分かれ、自己紹介をする暇もなく調理が始まりました。私の班の皆さんは菜の花は初めてで「何の花ですか？」と聞かれました。他にも「めんつゆは何で作られていますか？」「塩麹とは何ですか？」といった質問がありましたが、とっさに答えられず、いかに自分が何も知らずに食べているかを痛感しました。食べ物に限らず、日本のことを説明できるよう日々意識して生活しようと思いました。

前回の日本料理講習会では卵焼きを作る工程がロシア人の方々に大好評でしたが、今回もちらし寿司用の錦糸卵を熱心に調理されていたのが印象的でした。私の班の方々も均一で綺麗な薄焼き卵を作っていました。

先生の分かりやすい指導と班内のチームワークにより、短時間で4品が完成しました。初めて会った人同士でも、良い意味でお互いが遠慮せず、それぞれが出来ることを臨機応変にこなしていく皆さんの様子は、いつも見ていると本当にすごいなと思います。

食事中、前回の日本料理講習会にも参加したロシア人の方が「ロシアに帰省中、習った卵焼きを親族にふるまいとても



喜んでもらえました！」と先生にお礼を伝えていました。日本人にしてみればごく普通の家庭料理である卵焼きも、その方がロシアでまた作ることで特別なものになるのだなと思いました。実は、昨年末に私も同じようなことをしていました。以前ロシアに留学中、サンクトペテルブルクに住むロシア人の友人の家に何度か遊びに行ったのですが、行く度に彼女のお母さん

(アルメニアご出身) が作ってくれたのが「Армянская пахлава」というお菓子でした。パイ生地の中にくるみがぎっしり詰まったお菓子なのですが、これが本当に美味しく、帰り際にもお母さんが「寮で食べて」と容器いっぱい詰めて持たせてくれたのを覚えています。年末にこのお菓子のことを思い出した私は、レシピを検索して家で作ってみました。お母さんが作るあのずっしり分厚いパフラヴァにはなりませんでしたが、それでも家族には大好評で、祖母は「アルメニアのお菓子を食べる日が来るとは思わなかった」ととても喜んでくれました。料理は、自分が体験した異国の文化をまた誰かに共有してくれるものだと思います。だからこそこうした料理講習会は、互いの国の人と人をどこかで繋ぐ、貴重な場であると改めて思いました。

最後はキルギス料理の話にもなり、北と南で主食の中心が異なることや、サムサなどの料理について教えて頂きました。キルギス料理教室のお話も出ていたので、機会があればぜひ参加したいです。小野田先生、池永さん、企画して下さいました。参加者の皆様、ありがとうございました。

SORICA

キタヤマ 忍

2月号で少しだけ触れた「そりベビーカー」 soricaについてお話ししたいと思う。ロシア語は全くわからない子育てに追われる普通の4児のママとロシア生まれの商品が、今、北国の暮らしに快適な変化を起こそうとしているのだ。

事の発端は2014年、冬の札幌に始まる。通勤族の一人のママが冬の育児の困難にぶちあたる。ベビーカーが使えればもっと安全で自由に行動できるのではないかとそしてロシアのそり付きベビーカーの存在を知るも日本では販売しておらず断念。

しかし2020年、第4子の誕生を機にロシアNIKA社のそり型ベビーカーと別企業のそり付きベビーカーを個人輸入。実際に体感した実用性と同じ悩みを持つ北国ママ達の声から、これを普及させたいと翌年には自ら街頭でアンケート調査。幾つもの国内企業へ輸入や製品化の提案をするも断られ続けるが、NIKA社と製品仕様の疑問点などをメールでやりとりしていくうちに、自らの手で輸入販売する事を決意。2022年2月にはサンプル製品も到着した。



日本で販売される sorica (ロシア製) ブログ: 雪道用そりベビーカーを普及させよう <https://yuki-michi.com>

間もなくロシアのウクライナ侵攻。銀行の送金制限や配送、生産への影響を多大に受けながらも、NIKA社は新色の提案や輸出までの配慮、また4児のママさんはモニター利用者を募り、その反応をNIKA社と共有するなど、国境や政治を超えて互いに真摯に向き合い続けた。

昨年には商社の協力を得て販売サイトが完成。今1月に到着したロシア生まれのそりベビーカーは sorica (ソリカ) と名付けられて、待ちわびる家庭に届けられた。日本の一人の問合わせから始まった NIKA 社との繋がりが、当初から迅速丁寧な対応だったようだ。一人の女性を顧客からビジネスマンに変えた担当者も、その成長を頼もしく感じていたに違いない。

4児のママさんは日本での風当たりの強さを感じたそうだが、良い製品は良い、大企業ではできないことも個人ならできると道内の施設等へ寄付をするなど普及のために前進し続けている。私たちは何事もイメージ先行で躊躇してしまうことも多いが、そんな心配は意外と無駄なのかもしれない。実際すでに sorica の反響は大きく、ロシアと日本双方でベビーカーの枠を超えた進化を予感させている。

(ビデオグラファー)

国際放送史研究の戯言No027

余裕がない

島田 顕

Hさん問題の後処理はまだ続いている。すべての問題の原因は、Hさん本人が遺言を何も書き残すことなく、急逝されてしまったことにある。遺産を引き継ぐべき親族はない。このままではすべて国庫に返納ということになってしまいかねない。このことを回避するため、できる限りの措置を講じている最中だ。法的問題が未解決のために、アパートを引き払うことさえできない。1月から現在に至るまで、この問題で精神的にダメージを受け続けている状況だ。

話は変わるが、毎年初めに、その年にどのような研究をやるか、何の論文を執筆するかという計画・目標を立てることが、私の恒例となっている。「学問研究は、計画を立てて行わなければならない」と、ある先生がおっしゃっていたが、まさにその通りだ。計画・目標を立てなければ、何も始まらない。無駄に時を過ごしてしまうだけである。毎年1月後半に採点・評価付けが終わり、学務から解放されると、4月までの長期の春休みとなる。同様に8月前半に評価付けが終わると、10月初めまでの夏休みとなる。この二つの時期は、学問研究にとって重要である。集中して作業を行うことができるからである。資金があれば、一か月位、史料調査に行くこともできる。

しかしながら、計画を立てても予想外の事態が起これば、何もかも吹っ飛んでしまう。Hさん問題で他のことをする余裕が、今の私にはないのである。1月以降、手が付けられない。何もできない。

ちなみに、昨年後半からの私の目標は、これまで発表した

論考を一冊の本にまとめることである。私の最近の論考は、モスクワ放送の日本語放送と、コミンテルンの秘密放送、という2つの系統に分けられる。だから、一冊というよりも2冊にまとめる作業を進めていたのだが、中断したままである。手前味噌になるが、昨年私は、論文「コミンテルンとガイスター・スティンメー『幽霊の声』と呼ばれた放送―」を、ある学術雑誌に発表することができた。この論文は2号にわたる掲載の大作となった。もちろんこの論文も盛り込むつもりである。だが、一冊にまとめるという作業になると、統一した全体のまとめ・結論も行わなければならない。さらに新たな論述の付け加えも必要である。註の統一も。作業の課題は山積している。

精神的に余裕がないからできない、と述べたら、笑われてしまうことだろう。自分自身を奮い立たせなければならないことは、言うまでもない。だけど、穏やかな気持ちでいないと、学問研究はできないのではないだろうか。いやいや、これは自分自身への甘えといえるのかもしれない。やらないことの言い訳なのかもしれない。それでは、精神的に余裕がないときに、自分自身を学問研究に向かわせるためには、何をなすべきなのだろうか。自問自答を続ける中で、糸口の一つ見つけた。それは計画・目標の見直し、作業工程の見直しである。振り返ることが必要だ。そして地道な一つ一つの作業の積み重ねの上に、大きな成果があるのだ。そう信じたい。そう信じて、自分自身を奮い立たせて、私は前に進む。

「国際ロシア理解運動フォーラム」に参加して

林田 一博

この度2024年2月26日/27日の二日間、モスクワに於いて「多極化フォーラム」「国際ロシア理解運動フォーラム」が開催されたおり、光栄にも日本代表の1人として招待を頂きましたので、出席させていただきました。

欠席されたプーチン大統領による開会の言葉が、ラブロフ外相の代読によって宣言され、続いてマリア・ザハロワ外務報道官も発言されるなど、この大会はロシア連邦共和国が深く関わる正式なフォーラムであった事をお伝えいたします。

また今回のフォーラムでは、国際政治、外交の重要な議題を話し合うとの主催者側の意向から、専門家、活動家、市民、政治家が集まって対話と討論を行い、意見の交換が行われました。

○多極化フォーラム

- ①多極化する世界の問題点と、新たな挑戦について。
- ②参加者による世界各国と地域の役割。
- ③協力と対立、そして戦略について。

○世界ロシア理解運動フォーラム

- ①ロシアの文化、歴史、言語、価値観の普及とその為の討議
- ②ロシアの歴史的遺産の保存と促進、ロシアの文化的影響力について。

③世界におけるロシア語の地位とそれに関する問題点など。上記の議題について深く話し合われました。

このフォーラムでは熱心なディスカッションが行われ、参加者が“経験”“知識”“アイディア”を共有し、相互理解の基に

新たなパートナーシップを築く機会が提供され、この新しいプラットフォームにおける討論が、今後の世界政治と文化、外交に大きな影響を与えると確信いたしました。

このように強力な相互理解と、それに基づく協力と対話が積極的に行われるならば、現在各国が抱えている問題は、議論により共通の価値観に基づいて解決策を見出す事が出来るだろうと考えます。

また、会議場内では日本を含む西側の、植民地主義的政策について、非常に強い批難の声が高まりました。もはや“脱亜入欧”という価値観は崩壊し、“経済援助”“海外支援”という言葉さえ、国家同士の目線が合わない言葉と感ずる場面もありました。つまり、彼ら生産国が貧しくとも彼らが西側の軍事背景を排除し、彼らの経済背景と軍事力、人間関係と彼らの国家相互協力体制において、マーケットを閉じた場合には、私達の経済は確実に破綻すると言う現実が目の前にありました。それはロシア連邦共和国単独の覇権やピラミッド形の支配構造を持つものではなく、水平面上を放射状に広がるシステムであり、対等で文化的・歴史的価値観を尊重することを重視した未来の社会が描かれていました。

私にとって今回の会議は、時代の変化を直接感じ取れる重要なものであり、その貴重なフォーラムに一個人としてロシアより招待していただいた事を感謝すると共に、私が日口交流協会に所属させて頂いている事に感謝いたします。

ウズベキスタン便り

フェルガナ州の学校改革2

後藤 三加子

「進んだ外国の教育制度を取り入れた教育改革を進める」との方針を受け、フェルガナ州内各地区と主要都市から各1校ずつ合計19校を選び、日本の教育制度を取り入れた教育改革に取り組んでいる。私が州知事の教育アドバイザーに着任したのは、昨年の5月。会議や準備を重ね、9月の新学期から、道徳教育や生徒による各教室の清掃活動の導入、職員室を設けて教材や資料の共有と生徒理解のための交流の場を作り、ICTを活用した授業改善、クラブ活動の導入等々を進めてきた。

特にウズベキスタンの関係者からの要望が強かったのが、道徳教育を取り入れることだった。そこで、日本の道徳の授業の実際を知ってもらうためセミナーを開催した。校長先生や先生方に日本の道徳の授業で行われている内容などを解説したり、模擬授業も行った。生活の場面での出来事を劇にして、それぞれの役になってもらいその人物の気持ちを考えることで、みんなで使うものをどう使ったらよいかを考える授業。社会や交通のルールを守るのが大切な理由を考えたり、世界的に有名なイソップ童話を使ってうそをつくのはどうしていけないかについて考えてもらうなどを体験してもらった。



道徳科という教科のないウズベキスタンで、授業の中でどのように取り入れていくことができるか、どう扱えば取り上げた内容が教師からの押し付けに終わることなく、子供達自身が考え行動に繋げられるかを考え、取り組んでいくことが大切であることを強調、繰り返し確認しながら、教材や授業の交流を積み重ねている。始めは、聞くことが多かった先生方も回数を重ねるうちに内容や取り上げ方、教材など授業についてお互いの考えや感想を進んで交流するようになってきている。

改革は、各地区に1校ずつということで、それぞれの行政の関わり方や力の入れ方、導入のスピード等様々な条件が全く同じという訳にはいかず難しいところもある。しかし、お互いの学校の様子や授業の様子を交流するためのセミナー・授業研究会等を重ね改革を進めている。成果がすぐ出る取り組みではないが、子供同士がお互いを尊重し合い、学校が生徒達にとって楽しい興味深い学びの場となること、そして、生徒はもちろん先生方にとっても負担の少ない、有意義な改革になるようこれからも協力していくつもりだ。

(フェルガナ州 教育アドバイザー)

ハバーロフスクのガイドさん

畔上 明

「日本サハリン協会」の会報「チャイカ」44号(2024年3月1日発行)を読んでいて、高田(遠藤)玲子さんの訃報に接し、半世紀近く前たいへんお世話になっていたことを思い返しました。19年前から東京三鷹市に暮らしておられたことも今回初めて知り、そうであれば昨年12月27日に100歳でこの世を旅立たれる前に、お会いしたかったと悔やまれるのでした。

私が初めて会社勤めをしたソ連専門商社がオイルショックの煽りを受けて倒産し、25歳でユーラシア大陸を9か月間放浪、その旅から帰国し1977年4月に再就職した先が「日ソ旅行社」でした。

72歳の新川三十郎社長以下10名程の社員のそれぞれがロシア愛を抱いていて好感を持つことが出来た新たな勤め先でした。個人旅行を希望する顧客の旅程作成から始まりテレックスによる現地手配、東洋共同海運への船室、アエロフロート発券などを通して旅行業のいろはを覚えていきます。

入社後2ヶ月経った6月、白夜の旅にグループの添乗をするようにとの話を受け戸惑います。個人でロシア旅行をした経験があるばかりで、団体旅行がどのように行われるかも知らず、まして旅行添乗とはいかなるものかも分からず不安を抱えての初添乗の仕事となりました。

当時のソ連ツアーの多くは新潟からハバーロフスク行きの2時間の空路で入国し、その先、モスクワ、レニングラートなどを巡るパターンがツアーの大半を占め、先輩の指導によると最初の到



ハバーロフスク時代の遠藤玲子さん(日本サハリン協会斎藤弘美会長が玲子さんの遺品整理をされた際に見付けた写真)

着地ハバーロフスクで迎えてくれるガイドさんがスルーと一緒にその先もお世話してくれるとのこと、それが現地在住の遠藤玲子さん、団体旅行のアテンドとは如何なるものかを手取り足取り教えて下さった私にとっての先生でした。

大正12年関東大震災の年に樺太の真岡(現在のホルムスク)で生まれた玲子さん、戦後のサハリンから日本人が引き揚げる時期とお子さんが産まれるというというタイミングが重なりソ連に留まる運命に従うこととなったのでした。毅然とした表情からはソ連の中で如何にご苦労されてこられたかが窺われるようでした。サッカーでの骨折治療で帰国の機会を逸してしまった遠藤氏と1970年に再婚され共にハバーロフスクへ移り住んで国営旅行社インツリーストで通訳ガイドの仕事に従事されていたのでした。

1970年代から80年代にかけて、数十回にわたってハバーロフスクを起点とする旅行の添乗でインツリースト・ハバーロフスクの方々とお会いする時には遠藤夫人を始めとするスタッフ一同が家族のように暖かく出迎えてくれました。ガイド部長のチュートリン氏は私のことをアゼンスキーさんと親しみを込めて呼び、遠藤夫人がオフィスにいないときには探し出して息子を迎えるかのような対面のチャンスを設けて頂いたのでした。

市内を案内してもらおう中で特に好きな場所はハバーロフスクの歴史、風土を伝える郷土史博物館、動物の剥製が並ぶ中ラッコのつぶらな瞳と対面するのが楽しみだと遠藤夫人に話すと、あなたの目に似ているとあたかも母親のように優しい言葉をかけて下さったことも忘れられない思い出です。